



中国文学

目加田 誠

岩国市
(1904～1994)



【著作】
『詩経』（昭和18・日本評論社）
『唐詩選』（昭和39・明治書院）
『目加田誠著作集』全八巻（昭和56・61・龍溪書舎）
【閲覧情報】
大野城心のふるさと館 092155815000
【関連情報】
平成改元の際、政府より考案者の一人に選ばれた目加田の元号案メモは、「大野城心のふるさと館」に収蔵されている。

岩国市の目加田本家は、近江国愛知郡目加田村出身で、天正年間吉川春元に召し抱えられたと伝えられる。復元された現在の住宅は、十八世紀後半の建築と推定され、中級武家の住宅として全国的にも数少ない遺構の一つに取り上げられ、昭和四十九年二月、国の重要文化財に指定された。

末裔に当たる目加田誠は、「詩経」の時代から唐の杜甫まで千年に及ぶ中国文学の本質と美を追求した泰斗とされ、九十年の生涯を全うした。その偉業は、年譜に示した著書からも伺うことが出来る。しかし、九十年の生涯のほぼ前半は、続く父母の早逝により、中学生にして長男の責任を負い、自身は病に侵される等、辛い時期を乗り越えて東京帝国大学支那文学科に入学。昭和五年、第三高等学校教授を拝命。翌年結婚。三年後には、九州大学助教授を拝命の後、文部省在外研究員として中国に留学。帰国した昭和十年、一子を遺して妻病没。二年後に再婚するも昭和二十二年、またも妻病没。父母の死以来、誠にとって死はいつも隣り合わせであったことが『夕陽限りなく好し』（時事通信社、昭和六十より同われる）。

更に戦後の厳しさの中、四人の遺児の養育を背負い（辞職を申し出よう）としたが同僚から諫められ、（今の妻のお蔭で私は次第に立ち直った。）とある。その妻は、福岡女専から九州大学に進み、卒業後、山口女専教授として赴任した瀬利さくを。僅か二カ年であったが、多くの学生に惜しまれ再び福岡へ。山口女専の教え子福田百合子は、山口女子大学と改まった母校の教授として勤め上げた。昭和二十三年一月、目加田誠の妻となったさくを、母校福岡女子大学教授として勤める。その一方、自身の研鑽にも常に意欲的であった。後年、下関の梅光女学院大学教授を勤める等、山口との縁は深い。誠後半生のさくをとの生活は、一女を授かり、家庭の安寧はもとより、中国古典文学者、日本古典文学者として双方の学問は益々進展していったことは、遺された膨大な蔵書からも伺われよう。晩年の誠は、失明の進む苦しみの中で、件のエッセイ『夕陽限りなく好し』・歌集『残燈』を世に送り、多くの読者の感動を招んだ。

次は『残燈』での一首。
城山の麓の墓に父母は
いかに久しく我を待つらむ

父母の待つ岩国城山の麓の墓に永遠の安らぎを得たい心情が切に伝わると共に、作者にとって岩国はやはり、血に繋がるふるさとである思いの深さをうかがわせる歌である。さくをは、夫誠亡き後、平安文学に止まらず『世界小説史論』上・下（木犀舎、平二十二）を刊行。共に見事な生涯であった。

両氏の一万六千余の蔵書は、さくを没後御遺族により自宅のあった大野城市へ寄贈され、平成三十年七月二十一日に開館した「大野城心のふるさと館」に収蔵されている。今後同館では、「中国古典文学」、「日本古典文学」の講演会を開催すると聞く。（文・多田美千代）



「大野城心のふるさと館」に展示の目加田誠著書

目加田 誠 年譜

（提供・目加田懋（東谷明子））

明治37（一九〇四年）	三二歳
昭和10（一九三五年）	三二歳
昭和11（一九三六年）	三三歳
昭和12（一九三七年）	三三歳
昭和13（一九三八年）	三四歳
昭和17（一九四二年）	三八歳
昭和18（一九四三年）	三九歳
昭和22（一九四七年）	四三歳
昭和23（一九四八年）	四四歳
昭和24（一九四九年）	四五歳
昭和25（一九五〇年）	四六歳
昭和29（一九五四年）	五〇歳
昭和32（一九五七年）	五三歳
昭和35（一九六〇年）	五六歳
昭和39（一九六四年）	六〇歳
昭和41（一九六六年）	六二歳
昭和42（一九六七年）	六三歳
昭和44（一九六九年）	六五歳
昭和46（一九七一年）	六七歳
昭和49（一九七四年）	七〇歳
昭和50（一九七五年）	七一歳
昭和54（一九七九年）	七五歳
昭和56（一九八一年）	七七歳
昭和60（一九八五年）	八二歳
昭和61（一九八六年）	八二歳
平成1（一九八九年）	八五歳
平成3（一九九二年）	八七歳
平成4（一九九三年）	八八歳
平成5（一九九四年）	八九歳
平成6（一九九五年）	九〇歳
平成16（二〇〇四年）	九〇歳

父の任務地、福岡県久留米市で、目加田生五郎・スエの長男として誕生。

本籍、山口県岩国市大字横山。

山口県立岩国中学校卒業。

水戸高等学校卒業。東京帝国大学文学部支那文学科入学。

東京帝国大学大学院入学。東方文化学院東京研究所助手。

第三高等学校（現 京都大学）教授。

河村満寿代と結婚。

九州帝国大学助教授。文部省在外研究員として中国文学研究のために中華民国に留学（満二年）。

妻病没。

満州及び中華民国へ出張。

宮庄園子と再婚。

九州帝国大学教授。

中華民国へ出張。

『詩経』（日本評論社）刊行。

『風雅集―中国古典文学の研究』（惇信堂）刊行。妻病没。

瀬利さくを（福岡女専教授）と結婚。

文学博士の学位を授与される。

『新釈詩経』（岩波新書）刊行。

日本学術会議第四期会員。九州大学文学部長。

中国古典文学大系15『詩経・楚辭』（平凡社）刊行。

『唐詩選』（明治書院）刊行。訪中学術代表団員として中華人民共和国を訪問。

『洛神の賦』（武蔵野書院）刊行。『杜甫』（集英社コンバクトブックス）刊行。

九州大学教授定年退職。九州大学名誉教授。早稲田大学文学部教授。

『中国文学研究の功績』により西日本文化賞受賞。『屈原』（岩波新書）刊行。

『杜甫物語』（社会思想社）刊行。

『中国詩選（一）周詩・漢詩』（社会思想社）刊行。日本中国学会理事長。

早稲田大学教授定年退職。勲二等旭日重光章を授与せらる。

『世説新語』上・中・下三巻（明治書院）刊行。

随想『秋から冬へ』（龍溪書舎）刊行。

『目加田誠著作集』全八巻（龍溪書舎）刊行開始。

文心雕龍学会日本側学者団団長として訪中。日本学士院会員。

中国歴代王都の旅訪問団団長として訪中。

『夕陽限りなく好し』（時事通信社）刊行。

『洛神の賦』（講談社学術文庫）刊行。

『詩経』（講談社学術文庫）刊行。『中国の文芸思想』（講談社学術文庫）刊行。

『春花秋月』（時事通信社）刊行。

『残燈』（石風社）刊行。

『中国詩選―周詩・漢詩』（文元社 教養ワイルドコレクション）刊行。

桃 夭

桃 夭（周南）

桃は若いよ

桃之夭夭

桃の夭夭たる

燃え立つ花よ

灼灼其華

灼灼たる其の華

この娘嫁きやれば

之子于歸

この子に帰がば

ゆく先よから

宜其室家

其の室家に宜しからむ

桃は若いよ

桃之夭夭

桃の夭夭たる

大きい実だよ

有蕢其實

蕢たる其の実

この娘嫁きやれば

之子于歸

この子に帰がば

ゆく先よから

宜其室家

其の室家に宜しからむ

桃は若いよ

桃之夭夭

桃の夭夭たる

茂った葉だよ

其葉萋萋

其葉萋萋たり

この娘嫁きやれば

之子于歸

この子に帰がば

ゆく先よから

宜其家人

其の家人に宜しからむ

【余説抄】 嫁にゆこうとする若い娘を祝する歌。植物の美しい繁茂のさまにいいおこして、人を讃える詩は多い。…中略… 明るい桃の花、萋々と茂る葉、大きいその実は、若い娘の健やかな美しさと、やがてよい子をもつて、家の栄える象徴でもあらう。

出典『中国の名詩―うたの始めの詩経』（昭和57 平凡社）

学者としての力量と、詩人的感覚が発揮された訳として高い評価を得た。

目加田 誠